

おいしい図書館

No. 50

菅原峻氏講演

図書館を知る

つくる・支える

一九九八年十月五日

「図書館を始める」

住民と図書館員の集い

千葉・茨城集会所

今、日本の図書館は、時計だたら何時か

一九七〇年頃までは、確かに時計の針は夜明けに向かつて動いて来ましたが、今その針を逆に回そうとする動きがあります。そ

れは、図書館法を改訂し、図書館長の司書資格を不問に付そうとする動きと、地方自治体の財政破綻による図書館建設の棚上げという事態です。が、そのように逆に回り始めた針を再び夜明けに向かつて進める力は、やはり住民にあります。「図書館が良くなるも駄目になるも住民次第だ」と思います。

今、日本の図書館の状況は

とても荒涼とした風景に思えます。東京周辺には、浦安・朝霞・鶴ヶ島などのオアシスが見えまですし、ずつと視線を低くして自分の町だけ見ていると、結構草も沢山生えているように思えます。が、少し高い所から眺めると、オアシスや点在する草むらより、むしろそれらを取巻く荒地や砂漠の方がずつと目につき

ます。

図書館が良くなるも

駄目になるも住民次第

といいますが、図書館を利用する立場にある住民が図書館について話しを聞いたたり発言するといふ状況は、日本ではせいぜい遡っても十五年位のことです。歴史が変わりつつあることを実感させられます。



そもそも図書館は

どうして生まれ

たのか

を、「大草原の小さな家」で見とみましよう。開拓地に人々が集まり生活を始める必要なのが生まれくる。店郵便局・医者・教会、そしてお金を出し合って先生を雇い学校

がとぎる。図書館も同様に生まれて来た。自分達が本を讀みたい、その感動を人々と分かち合いたいと、自分達で作り、運営し、発展させて来たのです。

アメリカのポートルランド市では、一八〇〇年代に入々がお金を出し合つて私立図書館を始め、「ポートルランド図書館協会」と名付けました。やがて人口が増え都市としての形態が整つてくると、公立の図書館が必要だということになり、市がお金を出して、図書館の運営は図書館協会に任せました。図書館行政は、ポートルランド市を中核として周辺の自治体が一つになった図書館組織として活動し始め、図書館運営が大きな単位で括られサービスが行なわれるようになったのです。その時、職員は人口二〇〇〇人に一人、三十万都市では職員三〇〇人、そ

のうち九〇％は図書館の専門教育を受けた職員としました。

日本の図書館の荒涼とした風景の一つはこの**職員の貧乏**、

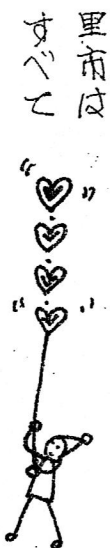
があると思います。考え方も実際のサービスも含めて、職員の間題がこの五〇年間置き去りにされて来たのです。

図書館は、住民自身が必要とし、住民自身が運営して来たという歴史があります。図書館だけとはなく、自治の主人公は私達住民なのです。それを今、回復しなければ、と思います。

「自治体が住民に対してどういう図書館サービスを約束するのか」を明確に唱つてゐるのが**図書館設置条例**です。伊万里市はその中に、大変格調高い高邁な目的を掲げました。「伊万里市は

の市民の知的自由を確保し、文化的かつ民主的な地方自治を促すため、自由で公平な資料と情報を提供する生涯学習の拠点として伊万里市民図書館を設置する。この中での「市民」とは、住民登録の結果としての市民ではなく、「自分で考え、判断し、行動に移すことが出来る人」と言えると思います。

こういう市民としての自覚に立つて、私達の欲しい図書館を考へる時、まず「**図書館を知る**こと、**見る**こと」です。ここからすべてが始まります。更に、「**百聞は一読に如かず**」（図書館についての必読書を讀む）、「**百読は一見に如かず**」（**百見は一体験に如かず**）——やはり図書館というのは体験しないと本當



のところはわかからないと思つのです。新瀨県豊栄市とは図書館の設計を安藤忠雄氏に依頼したのですが、氏は市長の「この町の二十世紀を託すのは今の子供達だ。この子供達に図書館のない町に育つてもらつては本當にこの町を託すことはできない。ぜひ素晴らしい図書館を作つて、そこで子供達は成長してほしい」という言葉に感動して引き受けましたとす。

「図書館をつくる」ではなく「始める」と言いましたよ。「つくる」というと建物・建築のことしか頭になくなります。図書館とは「サービス」ですから、本をはじめ様々な資料が必要とすし、それらを手渡ししてくれる職員が必要とす。

図書館を始める 順序
としては、

① 図書館を欲しいという
望みを持つこと

② 学ぶこと・知ること

③ 仲間を増やす
働きかける

と言えます。図書館に関わることとは一生の仕事とも言えますから、自分達の町の図書館の将来像を自分達で作る。それには自分達の町のことを知る、そして皆に知らせ、時間をかけて一緒に運動を進めることだと思えます。更に、図書館が出来てからが図書館づくり運動なのとす。その図書館をしっかりと「支える」ことと、私達が望んでいるサービスがなされるようにして行かねばなりません。

こういふ運動を続けて行くには、図書館とまじり合いと向

き合つて 市民として言うべきことは言うというのが大切とす。これができない官製の「図書館友の会」には賛成できません。図書館や行政がやるべきことをやつていて、尚且つ足りない所を自発的に補うというのがボランティアです。図書館そのものにまじり合いと意見を出して行ける組織じゃないと、本當の図書館づくり運動とはならないでしょう。

フィンランドが公共図書館誕生二〇〇年を記念して作った図書館建築の冊子には、「図書館は社会と市民の相互の信頼を象徴する機関である。その近うき易さ、その根本とする誠実さによつて、

社会の中でも最も高いレベルのデモクラシーを体現している。民主主義の風



ては健全な図書館があるというのは、その国の民主主義が健全であることの証だ。建築家にとつて、図書館ほど魅力のある対象はない。」とあります。又、ユーゴスラビアの詩人は、「一九四一年四月六日、ナチスはユーゴスラビアを侵略するに当たつて、首都のベオグラドに爆撃を加えました。その時、ナチスが真先に爆弾を落としたのは飛行場ではなく国立図書館とした。知識人は図書館を過少評価しがちですが、ヒットラーはよく知っていました。図書館が民衆の魂を収蔵しているということを」と言っています。

私達は、民主主義と図書館

館について、私達なりの理解をしつかり持ち、図書館の主人は私達住民だと確信し、運動を続けに行くことだ、と思います。

「小異を捨てて大同につく」

とよく言います。しかし、「小異を捨てず大同につく」と言いたいと思います。一人ひとりが様々な違った考えを持っていきます。それをそのまま認めながらこの町に素晴らしい図書館を実現する。その大目的に向かつて知恵を合わせて行きましよう。



菅原峻氏推選 図書館運動の為の必読書

・新版「これからの図書館」

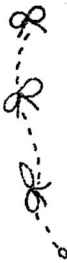
菅原峻著 昌文社

・「われらの図書館」

前川恒雄著 筑摩書房

・「移動図書館ひまわり号」

同右



・「図書館法を讀む」

森耕一著 日本図書館協会

・「だれのための図書館」

W.N.シーマア・エム・レイン著 日本図書館協会

・「図書館施設を見直す」

本田明・西田博志・菅原峻著

日本図書館協会

・「図書館のある暮らし」

竹内紀吉著 未来社

・「本のある広場」

ちほおさむ著 教育史料出版会

・「市民の図書館」増補版

日本図書館協会編 発行

・「図書館づくり運動実践記」

扇元久栄・栗原進・盛泰子

漆原宏共著 緑風出版

（青木和子）

イラスト・山田明子

発行 「おーい」図書館

連絡先 青木和子

047 311-0886

発行先 青木和子

047

311-0886